

も何人かの研修生が形こそ違え、何らかの異文化・異社会体験を今回したのではない。仮にそうだとすると、ではそれに何の意義があるのかと問われても、「これこれこうだ」と、即答できるような意味づけを報告者自身、現時点ではできている訳ではない。だが一方で、おそらくひとついえるようなのは、普通の観光ツアーはもとより、短期留学でもできない体験を、今回のフィールドスクール

は彼/彼女らに提供できたのではない。そして、そのことを通して、異文化・異社会をみる視野なり、想像力なりを彼/彼女らに拡大させ得る機会を、本プログラムが確実に提供できたのではないかという点である。もし本当にそうだとしたら、今回のフィールドスクール・プログラムはうまくいったといえるのではないかと、自画自賛になるかもしれないが、報告者自身はそのように考えている。

---

## 「山下財宝」にとり憑かれる人々

師 田 史 子\*

### 「地図はないのか」

この質問を、幾度投げかけられたであろうか。調査地選定のためにフィリピン・ミンダナオ島の農村を訪問し、私が怪しい奴ではないと判断してもらえるほどに人々と打ち解けたころ、必ずと言ってよいほどにこの質問が誰からともなく放たれた。「ない。おじいちゃんに聞いてもおばあちゃんに聞いてもないって言っていた」と即答する。ない、とだけ返答すれば、矢継ぎ早に「日本に帰ったら家の中を探してみろ」「祖父・祖母に聞いてみる」と返ってくることは火を見るよりも明らかであるので、会話の展開を先取りしてやりすごすことが、この類の話に嫌気がさして

いた私の癖になっていた。

人々が求めている地図とは、山下財宝のありかをしめす地図である。フィリピンでは「ヤマシタ・トレジャー」と呼ばれるこの財宝は、第二次世界大戦終戦時に山下奉文大將率いる日本軍によって埋められたとされる莫大な埋蔵金全般を指す。財宝なんて埋まっているわけがない、なぜこのような話を真に受けているのか。これが、山下財宝に対する私の第一印象であった。しかし、ミンダナオ島の村々では、外来者にとってははにわか信じがたい財宝を、実に多くの人々が真剣に掘り当てようとしていた。なぜだろうか。

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

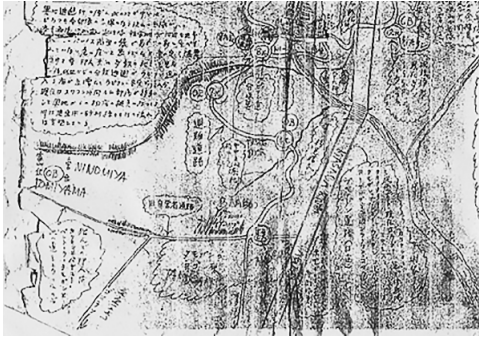


写真1 財宝の地図とされるもの

### フィリピンにおける財宝譚の数々

人々が山下財宝に熱狂する理由のひとつには、フィリピン国内における数多の財宝譚がある。特に、大戦末期に日本軍が退却した中央山地の中心都市バギオ市周辺は、財宝が多く存在する地として有名である。かつて日本軍が接収した住宅や、軍病院跡、退避壕跡など、日本軍駐留と結びついた場所で、金の延べ棒数本や宝石類が発見されたという噂は多数見聞されるが、発掘者が同定できることは稀であるという [梶原 1995: 22]。

20年間ものあいだ権力を掌握し、1986年のエドサ革命で失脚したフェルディナンド・マルコス元大統領は、財宝の発掘により富をなしたといわれる最たる人物である。1971年、錠前師であるロジャー・ロハス氏がバギオ市の山中で発掘した「ゴールデン・ブッダ」を、強制捜査部隊が強奪し、全くの別物にすり替えて返却した事件に、マルコスが関与していたという [笹倉 1998]。1992年には、マルコスの妻イメルダ・マルコスが、夫の選挙資金の一部は山下財宝に負っていたと認める発言をしたことで、財宝とマルコスとのつながり

に対する疑義は国民のあいだで一気に高まり、トレジャーハンティングは熱を帯びた。

### 日常的な宝探し

政府は2007年より、発掘時の事故防止や重要文化財の保護等を目的として、発掘作業者に対して環境天然資源省へ1万ペソの手数料の支払いを義務づけている。しかし、ミンダナオの農村においては、政府の許可を必要とするような、あるいは政府に目を付けられるような大規模かつ本格的な発掘作業ではなく、家の軒先の土地をスコップで掘ってみる、というような日常的な宝探しが試みられているといった方が正しい。宝探しは生業の片手間で行なわれることがほとんどである。

「ほら、あのヤシの葉で覆われたところを、地主が掘っているんだ。」ある日、ココヤシ農村を歩いていると、連れ立っていた男性がこう教えてくれた。道端には、ヤシの葉やブルーシートで四方が覆われた箇所がいくつかあった。発掘作業を隠蔽するためのこのような覆いは、かえって宝探し中であることを露骨に主張し、それが新たに他者を宝探しへと駆り立てるかのようであった。どれくらい深い穴なのか、のぞくことはできなかったが、発掘作業はもっぱら手作業だという。「あの地主はもう9ヵ所も掘っているけど、お宝はまだ出てきてないってよ」と呆れと期待が混じった口調で男性は続けた。

### 「宝の埋まる土地」

人々が財宝探しへ誘われる理由の2つ目には、宝探しを試みるに足るほどの、宝の存



写真 2 発掘作業中の穴

在を担保する十分な証拠を日常的に目撃することにある。

稲作農村に滞在していた時、30歳半ばの主婦が、「山下財宝を持っているので確かめてくれ」と非常に内密な様子で話しかけてきた。家にお邪魔すると、壺や喫煙具などの土器を丁寧に取り出して来た。触ろうとすると、手を払いのけられるほどに丁寧に保管されていた。「家の下の川から出土したのよ。これはヤマシタ・トレジャーよね。あなた、詳しくないの?」と迫られたものの、土器に関して全くの無知である私は「日本に帰ったら、詳しい人に写真を見せてみる」と言って退散したが、真相は今も確認していない。

この主婦のように、実際に財宝らしきものを発見したことは、村における財宝の存在を証明する確かに大きな証拠となる。それと同程度に、急激に富を築いた者の存在や、外部からの「宝の埋まる土地」としてのラベリングも、人々の宝探しへの動機となっている。

たとえば、バイク運転手2人と酒を飲んでいたら、「トラックを買って雑貨屋で大儲けしているAさんは、どうやら財宝を当てた

らしいな」とどちらかが口火を切った。「ああ、ちがいない」ともうひとりが相槌をうち、「ダバオ市に出稼ぎに行っていた時、『君の村は裕福なのだろう、だってトレジャーのたくさんある地じゃないか!』って言われたよ」と興奮した口調で返答した。さらに自分自身も財宝を見つけたことがある、と切り出し、ブラックダイヤモンドであるらしい写真を披露した。

富を築いた者は、その背景に山下財宝の存在を噂される。一方、富を築いた者自身は、財宝の発掘を否定するか、あるいは財宝を怖ろしいものとして語る。とある日、村の金持ちのひとりが、日本風のゴールデン・ドラゴンの像について語り出した。彼の父の兄弟が発見したが、ほどなくして亡くなったという。その像を受け継いだ者も急死した。「この地は日本兵に呪われているのだ」と金持ちは私を責め立てるように断言した。その後、話は戦時中に先住民がこの村で残虐な日本兵に食われた話へと続き、日本人代表として私は彼に謝罪するに至った。



写真 3 財宝であるとされる壺

### 宝を取り返しにやって来る「日本人」

山下財宝の話が頻繁に耳に入るのは、私が日本人であるからである、という側面は無視できない。日本人や外国人の訪村は、財宝を取り返しにやって来る日本人、奪取しに来る外国人として語られるとともに、村における宝の存在の信憑性はそれに比例して高まる。数年前にアメリカ人と日本人のプロテスタント系の宣教集団が訪村した際を回顧し、ある人は「布教は建前で、本当は埋まった財宝の有無を確かめに来たのだ」と疑い、また別の人は「数年後に日本人が戦争で死んだ先祖の元に来るらしい。宝を取り返しに来る気だ」と語気を荒げた。

かれこれ10年以上、ミンダナオ島の生活支援活動をしている、とある日系NGOに関しても、表層では支援を礼賛するものの、陰では財宝発掘のための活動を疑う人々は少なくない。「あのNGO、支援活動は建て前で、実はこの場所に宝のありかが彫られた石を見つけたから、発掘に来ているんだ。この前、家の裏の土地を買いたって職員が交渉しに来たが、その目論見がわかってたから断ったぞ」という調子である。

外国人の訪問が稀である地域において、とりわけ日本人となれば、それは人々にとり、財宝に直結しかねない訪問なのである。

### おわりに

このように、さまざまな場面において、人々は財宝への想像力を駆り立てられ、実際に宝探しへと誘われている。財宝譚は国家レベルのものから村落レベルに至るまで多岐に渡って人々を刺激し、私のような日本人の突如の訪問は宝の存在をますます裏付ける。財宝は、「まだ一ない」希望として、人々の未来の可能性となる。

しかし、一攫千金を夢見る人々の財宝探しへの熱狂は、時に残酷な結末を残す。

調査を終え、日本に帰って来て間もなく、懇意にしていた村の女性からメッセージが届いた。「あの男の子、ヤマシタ・トレジャーをお父さんと探しに行ってた時に、崖からの落石で亡くなったよ。」彼は自分の村に財宝が眠っていることを信じてやまない、まだ18才の青年であった。私の調査にも親切に協力してくれる、近しい存在のひとりであった。

山下財宝の存在は、亡霊のように、人々にとり憑いて離れない。そして今、私にも。

### 引用文献

- 笹倉 明. 1998. 『最後の真実―「山下財宝」その闇の奥へ』KSS出版。  
梶原景昭. 1995. 『「山下財宝」の行方』『年報人間科学』16: 21-37.